

澁澤龍彦の「蔵書目録」について (3)

跡上 史郎

一 泉鏡花生誕一五〇年と澁澤龍彦

二〇一九―二〇二〇年に国書刊行会から刊行された泉鏡花著／澁澤龍彦編／山尾悠子解説／小村雪岱装釘・装画『澁澤龍彦 泉鏡花セレクションⅠ 龍蜂集』(二〇一九・一〇)、『同Ⅱ 銀燭集』(二〇二〇・一)、『同Ⅲ 新柳集』(二〇二〇・四)、『同Ⅳ 雨談集』(二〇二〇・九)は記憶に新しい。

一方、一九八七年没の澁澤が、なぜこれらアンソロジーの編集を担当したと言えるのか。その理由は、桑原茂夫「澁澤龍彦 泉鏡花セレクション」誕生秘話(前掲『龍蜂集』)が説明している。『別冊現代詩手帖 泉鏡花特集号』(一九七二・二)により、七〇年代鏡花ブームの一翼を担った桑原は、學藝書林移籍後『泉鏡花作品集』を企画し、「作品の選定から解説まで全体の編集を、澁澤龍彦さんと種村季弘さんをお願い」した。しかし、「その最終案の作成中」、「全集を出していた版元が突然、全集を再販するから作品集企画を取りやめるように言ってきた」。よってこの企画は頓挫したが、編集作業中作成された澁澤と種村の収録候補作リストが残され、桑原が密かに保存し続けたそのうちの一つが、二〇一九年になってから日の目を見たのである。

また、二〇二三年は、泉鏡花生誕一五〇年であった。泉鏡花記念館会報『鏡花 雪うさぎ』vol.18(二〇二二・三)に掲載された磯崎純一「澁澤龍彦と鏡花——磁界としてのシブサワ」は、泉鏡花文学賞と澁澤龍彦の関係の深さ、「一九七〇年以降の鏡花文学の目を見張るばかりのルネッサンス」において澁澤が果たした役割の大きさについて、さまざまな例証を挙げており、現在進行形で鏡花と澁澤の縁が深まり続けていることの一端を窺わせる証言と言えるだろう。

いまだに新たな書籍を生み出し続けている(澁澤龍彦の泉鏡花)について、『蔵書目録』から眺めてみると何が言えるだろうか。澁澤龍彦はどのような資

料に基づいて鏡花を読み、鏡花に関する原稿を書いていたのか、可能な限り実証的に述べてみよう。

二 澁澤が読んでいた『鏡花全集』その他

上記セレクションシリーズのもととなった澁澤のリストは山尾悠子が『龍蜂集』の「解説」で紹介している^①。「これは岩波書店版鏡花全集(当時の初版では全二十八巻)の巻立てに沿ったリスト」で「各巻の作品の収録順、また作品名と巻数の合わない箇所」を山尾が「微修正」したものである。

泉鏡花 作品 澁澤龍彦選

卷一 活人形 夜行巡査

卷二 外科室 化銀杏 紫陽花 照葉狂言

卷三 龍潭譚 X 蟪蛄鯨鉄道 化鳥 さ、蟹 清心庵 な、もと桜 髯

題目 玄武朱雀

卷四 蛇くひ 山僧 笈摺草紙 黒百合 星あかり 鶯花経 通夜物語

卷五 幻往来 名媛記 高野聖

卷六 式部小路 裸蠟燭 処方秘箋 蠅を憎む記

卷七 お留守さま

卷九 千鳥川 海異記

卷十 春昼 春昼後刻

卷十一 草迷宮 沼夫人

卷十三 酸漿

卷十四 貴婦人 夜釣

卷二十二 眉かくしの霊

卷二十三 貝の穴に河童の居ること

卷二十六 紅玉 海神別荘 天守物語 山吹 戦国茶漬 [引用者注／『鏡

花全集』初版を参照の上、「海神別荘」「紅玉」の位置を入れ替え『鏡

花全集』の収録順に合わせた。]

澁澤蔵書中の『鏡花全集』は以下である(『蔵書目録』では、全集類の刊行期間や、その他の書籍についても刊行月がわからないので、以下可能な限り調査によって補い、行頭に示す)。

・40/03～42/11 [★●18-04-01 鏡花全集【全28巻】、泉鏡花、岩波書店、1941
 (★——①に書き込み有)]
 戦災で澁澤の蔵書は焼けてしまったので、戦後古書として購入したものと推定
 されるがその時期は不明である。書き込みのある第一巻には『草迷宮』を収
 録している。

一方、『蔵書目録』中の鏡花本は同全集のみではない。目次と共に示す。

・47/11 [18-05-03 鏡花随筆、泉鏡花、角川書店、1947]「目次／松の葉、畫の裡、
 麥搗、露宿、十六夜、湯どいふ、二三羽—十二三羽、あひあひ傘、新富座
 所感、夏目さん、みなわ集の事など、入子話、七寶の柱、たそがれの味、ロ
 マンチックと自然主義、能樂座談、東京の女と大阪の女、卷末言」

・55/09 [01-02-21 高野聖、泉鏡花、河出書房、1955]「河出文庫。目次／高野聖、
 夜釣、貝の穴に河童の居る事、解説(村松定孝)」

・56 [01-02-20 夜行巡査・外科室、泉鏡花、岩波文庫、1956]「初刊1953の目
 次／義血俠血、夜行巡査、外科室、琵琶傳、化銀杏、龍潭譚、玄武朱雀、解
 説(奥野信太郎)」

・57 [01-02-19 日本橋、泉鏡花、角川文庫、1957]「初刊1956。収録は『日本
 橋』のみ。解説(村松定孝)」

『鏡花随筆』の編集は角川源義で「卷末言」も角川が書いている。角川の選
 択眼に興味を持って所持していたのかもしれないが、収録作は小説ではないの
 で、『泉鏡花作品集』には使いにくかったであろう。一方で河出文庫〔高野聖〕
 の収録作のすべて、および岩波文庫〔夜行巡査・外科室〕の七作中五作〔傍線
 引用者〕がリスト入りしている。澁澤は『鏡花全集』第一五～二四巻の大正・
 昭和期の鏡花作品に対して非常に冷淡であるが、「貝の穴に河童の居る事」(昭
 六)のような異色作を拾っているのは、文庫で親しんでいたからかもしれない。
 長編の『日本橋』がリストに入らないのは当然だが、後の三島由紀夫との対談
 (後述)では同作に言及している。

また以下も鏡花作品を収録している。

・76/01 [☆40-01-248 現代日本の文学・第二期①、泉鏡花、学習研究社、1976]
 「目次／泉鏡花文学紀行、鏡花幻想世界行(奥野健男)、夜行巡査、外科室、
 照葉狂言、高野聖、婦系図(前編)、婦系図(後編)、歌行燈、天守物語、売
 色鴨南蛮、眉かくしの霊、注解(三田英彬)、年譜(村松定孝)、泉鏡花文

学アルバム、評伝的解説(村松定孝)。1980・3、四版で確認]

なお、後の岩波版全集再版(一九七三・一一～一九七六・三)で追加された
 『別巻』も『蔵書目録』に確認できる。

・76/03 [18-05-04 鏡花全集別巻、泉鏡花、岩波書店、1976]
 『蔵書目録』中の鏡花作品を収録した書籍は以上である。

三 一九六〇年代における鏡花への言及

マルキ・ド・サドのイメージが強い初期澁澤であるが、六〇年代の初めから
 鏡花に言及している。可能な限り拾い上げてみよう。

・61/01 「ユートピアの恐怖と魅惑」(『聲』1961年冬号「第10号、1月刊」↓
 『神聖受胎』現代思潮社、1962・3)

エドガー・ポオの『ランダアの家』や泉鏡花の『龍潭譚』などは、かか
 る詩的ユートピアの典型的な例である。

・61/02 「仮面について——現代ミステリー映画論——」(『シナリオ』↓『神聖
 受胎』1962)

わたしは胸のあたりが泉鏡花流にいえば「キヤキヤして」きて、足早に
 通り過ぎてしまうほどの弱虫だが、

・62/01 「古代人は知っていた」(『寶石』「初出題／ギリシャ人は知っていた」
 ↓『毒薬の手帖』桃源社、1963・6)

キルケーの館のまわりには、魔薬によって狼や獅子に変えられた彼女の
 恋人たちがうろついている。(このあたり、鏡花の『高野聖』にちょっと
 似ている。)

・67/09 「近代文学における黒とエロス」(『潮流ジャーナル』1967・9・17→『エ
 ロティシズム』桃源社、1967・12)

わたしたちは、泉鏡花や谷崎潤一郎や川端康成のような日本の耽美派作
 家の作品のなかにも、この魔女崇拜の思想を読み取ることができるし、
 またウラジミール・ナボコフの『ロリータ』のなかにも、そのもつとも
 現代的な一変種を認めることができる。

『龍潭譚』『高野聖』を中心とした「ユートピア」「キルケー」「魔女崇拜」の視
 点が晩年まで継続するが、

54 [★08-02-21 The romantic agony, Prax(Mario), trad. de Angus Davidson, Oxford university press, 1954]

の「Fatal woman」を念頭に置いたものである。澁澤は後に

74/06 [01-06-30 近代日本の思想と芸術Ⅱ、芳賀徹他編、講座比較文学④、東京大学出版会、1974]

に収録された倉智恒夫「西洋近代小説の日本的翻案—森田思軒と泉鏡花—」(pp.155-179)に興味を示し、『蔵書目録』巻末に収録された「創作ノート影印(ノート本体)」に「鏡花 講座比較文学4『近代日本の思想と芸術Ⅱ』p.169-179」とメモすることになるが、この論文は、『白鬼女物語』『高野聖』の原型の材源として森田思軒訳『金鑪譚』(アプレイウス『黄金のロバ』)を検討し、『高野聖』に接続するもので、澁澤の関心と共通するものである。

また、澁澤は初期から晩年まで「キヤキヤ」等の鏡花語を好んで使っている。さて、三島は、世界文学的視野から鏡花を捉えようとする澁澤の鏡花への言及を知って次の対談を依頼したのではないだろうか。

69/01「鏡花の魅力」(『日本の文学4 尾崎紅葉/泉鏡花』中央公論社、月報)

澁澤 僕は「照葉狂言」を最初に読んだんですよ。ものすごくロマンチックで、あれでまいりました。「龍潭譚」というのは、「高野聖」の完全な原型ですね。

澁澤 「日本橋」は筋が重層してますからね。今でも、時々わからないのがありますよ。しばらく読んでいくと、アツそうかって……。だからかまわずどんどん読んでいくとしまいにわかりますね。

三島 澁澤さん、鏡花の芝居は嫌いですか。「天守物語」なんか。／澁澤 あれは最高傑作ですね。

澁澤 「山吹」ですね。あれはすばらしい。汚ない爺さんは、人形使いで彼女に鞭で打たれるんですね。

澁澤 「天守物語」とか、「山吹」とか、「戦国新茶漬」とか、「海神別荘」とか、「紅玉」とかみんなシニールレアリズムですね。結局、鏡花は理想主義者かなあ、天使主義者かなあ……ニヒリストじゃないでしょう。

澁澤 僕が恐いのは「春昼」。自分が出てくる。自分が出てくるというのは、鏡花の恐さの中によくありますよ。「眉かくしの霊」もそうですね。

澁澤 「夜行巡査」以来そうですね。(中略) 純粹観念だからな。

澁澤 気持悪いのは「酸漿」という小説。

三島 「高野聖」のなんかのをどう思いますか。／澁澤 アニミズムとかよく言われるけれども……動物が変わっちゃうのは、どうなんだろうな。(中略) ジャン・ジュネなんかもそうですね。

澁澤 純粹観念だとはいいながら、ポーなんかの世界とは全く違うでしょう。(中略) 鏡花はホフマンに近いですか。ホフマンもああいうようなスタイルですね。／三島 ホフマンに近いでしょうね。ロマンティケルというのは、どこか快活ですね。(中略) 澁澤 僕はたとえばノヴァーリスなんかもそういう点で好きですね。

澁澤 アニミズムといっても、室生犀星とも違いますね。

澁澤 ずっと後になって柳田國男を読んで、非常に面白かったそうですね。／三島 そういところはジュネにちよつと似てるね。／澁澤 「黒百合」というのが、また凄いですね。

「日本橋」以外の作品名は、すべて先の『泉鏡花作品集』のための「澁澤リスト」に挙がっており、澁澤の鏡花作品への興味はかなり固定されているようだ(『戦国新茶漬』は「戦国茶漬」の初出題だが、なぜ初出題の方を用いたのかは不明)。

外国作家との比較の中でもホフマンは特に重要で、この対談(月報)が挟み込まれた『日本の文学4』本体における三島由紀夫による「解説」中の「この作家は、もっとも純乎たるロマンティケルとして、E・T・A・ホフマンの墨を摩するものである」と見解を同じくしている。澁澤は後のアンソロジー『幻妖 日本文学における美と情念の流れ』(現代思潮社、一九七二・一一)に梶井基次郎の分身小説「Kの昇天——或はKの溺死」(『青空』一九二六・一〇)を採録し、「解説」において「私は昔から、このドイツ・ロマン派風の快活な、死を描いて快活な、『Kの昇天』という短編を好んできた」と述べているが、これは三島の「ロマンティケルというのは、どこか快活ですね」というホフマン評をそのまま借用したものと考えられる。「柳田國男を読んで、非常に面白かったそうですね」については、『鏡花全集』第二八巻の「遠野の奇聞」を読んでいたであろう。

69/04「地震と病氣——谷崎文学の本質」(『現代日本文学大系第三十巻 谷崎潤一郎』筑摩書房、月報→『偏愛的作家論』青土社、1972・6)

文学好きのひとならだれでも知っている話であるが、泉鏡花はあたかも原始人が幼児のように、自然に対する恐怖心を生涯もちつづけた作家で、つねに雷鳴におびえ、(中略)

私が鏡花と潤一郎をならべて、こんな怖いものの比較をこころみたのは、ただ物好きな気持からだけではない。(中略)

谷崎の興味は徹頭徹尾、地上界にあって、鏡花のようにお化けや幻影に憑かれたことは一度もなく、(中略)

幻想といっても、それはたとえば泉鏡花の世界に見られるような、非現実や超自然を意味するのではなく、官能的興奮とむすびついて、頭のなかで醗酵するところの想像世界のことである。

*69/08書評「『夢野久作全集』第一巻」(『朝日ジャーナル』1969・8・3)→『澁澤龍彦集成Ⅶ』1970→『偏愛的作家論』(1972)

文学史的にながめれば、夢野久作は、泉鏡花以来はじめて近代日本文学史上に現われた、真の幻想家の資質をそなえた作家であり、骨の髄までの浪漫的魂の持主であった。浪漫的魂と切っても切れない関係にあるのが、土着の精神というものである。なるほど、彼の作品には、鏡花の世界におけるように、幽霊そのものは出てこないけれども、幽霊にひとしい狂った人間は必ず出てくるのである。

*69/09「メタモルフォーシス考」(『ユリイカ』)→『澁澤龍彦集成Ⅶ』桃源社、1970・9→『黄金時代』薔薇十字社、1971・7→『変身のロマン』立風書房、1972・9)

上田秋成『夢応の鯉魚』から泉鏡花『高野聖』まで、李景亮『人虎伝』から太宰治『魚服記』まで、アプレイウス『黄金の驢馬』からフランツ・カフカ『変身』まで、メタモルフォーシスを主題とした文学作品は、古来東西にわたって枚挙にいとまがない有様であり、

鏡花と谷崎との対比、鏡花と夢野久作との対比、世界の変身文学との対比等、澁澤はホフマンの例と同じく対比によって鏡花をとらえようとしているが、特に久作との対比という視点は、後に鏡花研究者に影響を与えている。

四 一九七〇年代における鏡花への言及

*70/04「幻想文学について」(『ユリイカ』)→『澁澤龍彦集成Ⅶ』1970→『黄金時代』(1971)

カイヨワのアンソロジーに採録されている日本の幻想物語が、小泉八雲と谷崎潤一郎(それにしても『刺青』が幻想小説であろうか?)を別とすれば、すべて十九世紀以前のものだということを考慮に入れておく必要がある。泉鏡花はホフマンより前近代的であるかどうか、これは私たちにとつても、にわかには断定し得ない問題である。

もちろん、澁澤においては鏡花とホフマンは比較対象として並び立つと断定されるはずである。カイヨワのアンソロジーは次のものである。

*66/04 [★08-02-16 Anthologie du fantastique ①②, Caillois(Roger), Gallimard, 1966]

澁澤の幻想文学論は、①の序文「De la fêrie à la science-fiction」の影響を強く受けている。他に有力な幻想文学論として後発の以下がある。

*70/03 [08-02-37 Introduction à la littérature fantastique, Todorov (Tzvetan), Seuil, 1970]

*75/02 [★02-05-38 幻想文学—構造と機能、トドロフ、渡辺明正他訳、朝日出版、1975]

澁澤は、『幻想のラビリス』序(『日本幻想文学大全』上 幻想のラビリス(青銅社、一九八五・九)において「ツヴェタン・トドロフはつまらないから読まなかった」と言っているが、読まずに「つまらない」というのもあり得なくはないもののいささか苦しく、実際邦訳の方には書込みを示す★がついているので読んでいる。トドロフの議論は、リアリズムを基礎に置くモーパッサンのようなタイプの幻想文学との相性が良いのだが、澁澤が「ロマンティック」と見なす鏡花に対しては、カイヨワの方が相応しいと捉えているものと推測される。

*70/04「フローラ幻想」(『草月』「初出題／花々幻想」)→『ヨーロッパの乳房』立風書房、1973・4)

日本でも、明治のロマン主義的小説家として異彩を放っている泉鏡花が、

同じような神秘的な『黒百合』の物語を書いています。

鏡花の「黒百合」だって、北海道あたりまで行けば、見つからないことはないのですが、

・71/05 「吉村博任『泉鏡花——芸術と病理』」(『海』↓『偏愛的作家論』1972)
鏡花は明治の作家のうちでも、もともと私が特別に関心をいだいている作家なので、(中略)

何よりもまず、この著者が鏡花の『春昼』および『春昼後刻』を採りあげ、「神韻縹渺たる気品と妖しい幻想に溢れている点から、一代の名作たるを失わない」と高く評価している点が、私には嬉しかったと申しあげておく。なぜかといえば、この作品にすこぶる執着のある私は、(中略)

小品『蠅を憎む記』に関して、吉村氏は次のように書いている、(中略)
鏡花のドラマの構造はじつに単純で、一方に強い人間、悪玉、権力、世俗があり、他方に弱い人間、善玉、正義、清純がある。そして、この無力な後者を庇護するものとして、いつも登場するのが一種の魔性をそなえた美女、一種の吸血魔女(『照葉狂言』の「野衾」の挿話を想起された)、すなわち鏡花の永遠の女性なのである。かくて、この極東のロマンティックも、あのマリオ・プラッツ理論にそっくり包括される、ロマンティック・アゴニーの性愛構造の典型的なパターンの一つを示すことになるのである。

「黒百合」は三島との対談でも挙がっていた。また、ようやくこの頃になって、澁澤の蔵書に鏡花に関する評論・研究書が加えられることになる。その最初のもの

・70/10 「★18-05-02 泉鏡花——芸術と病理、吉村博任、パトグラフィ双書、金剛出版新社、1970)

であり、「吉村博任『泉鏡花』」は書評として書かれたものである。澁澤の『春昼』への強い関心は、三島との対談でも示されていたが、パトグラフィの方面からのアプローチは、当時の澁澤にとつて非常に興味深いものであったろう。また「The romantic agony」で鏡花を捉える視点が継続している。

・71/05 「編集後記」(『暗黒のメルヘン』立風書房)

「龍潭譚」は鏡花の初期(明治二十九年)の短編であるが、早くも後年の傑作「高野聖」の主題——すなわち、いざいざとも知れぬ仙境に魔性の美

女が住んでいるという、きわめて浪漫主義的な主題——が現れているという点で、とくに私の愛惜する作である。

実際に澁澤がこのアンソロジイに収録したかったのは「春昼」「春昼後刻」だったのだが、分量が多すぎるので「龍潭譚」が選択された。澁澤は「春昼」「春昼後刻」に多大な関心を示しながらも、ついにまとまった評論を書くことがなかった。「仙境に魔性の美女」型を扱ったものとして「ランプの廻転」(『文藝』一九七五・一〇)という名作があるだけに、自分自身が分裂してしまう恐怖という「春昼」型についても書き残していたら、という興味は尽きない。

・71/12 「サロメの時代」(『サロメ』公演パンフレット)『浪漫劇場』↓『偏愛的作家論』1972)

泉鏡花や谷崎潤一郎に親しんできた少年が、それと並行して、ワイルドやポーを選ぶのはごく自然の成り行きだったはずだ。三島さん自身が簡明直截に書いている。

これは、三島に関する言及が主である。

・72/09 「編集後記」(『変身のロマン』立風書房)

鏡花の幽霊は多く女性であり、しかもマリオ・プラッツが名著『ロマンティック・アゴニー』のなかで公式化したような、Fatal woman「破滅をもたらす女」であるという点特徴的である、と私は考えたい。(中略)
『高野聖』は、このような女に憧れる鏡花の性愛構造の秘密を、メタモルフオーシスの怪異譚として、白日のもとに暴き出した傑作と言うべきであらう。

・72/12 「幻妖のコスモロジー」(『幻妖 日本文学における美と情念の流れ』現代思潮社)

泉鏡花の絶品『天守物語』は、(中略)これにも民俗学上の下敷があると、いうことを指摘しておくべきだろう。南方熊楠の『人柱の話』に、(中略)妖怪の純粋なアンチ・ヒューマニズムの美しさが、とくに際立たせられた作品である。

「Fatal woman」が強固な一貫性を示しているが、

・52/02 「●18-07-01 南方熊楠全集【全12巻】」南方熊楠、乾元社、1951 [※澁沢敬三から譲り受けたものだが時期は不明] 第四巻、または

・69 [26-02-14 南方熊楠随筆集、南方熊楠、筑摩叢書、筑摩書房、1969] 初刊

1968・101]

所収の「人柱の話」に基づく『天守物語』の材源考察もこの後何度か使いまわされることになる。「鏡花全集【全28巻】」第三巻「月報」第一四号（一九四一・一二）に「泉鏡花蔵書目録」が、第一六巻「月報」第一九号（一九四二・四）に「鏡花先生の「草双紙」目録」が、「鏡花全集別巻」「月報」第二九号（一九七六・二）にも「泉鏡花蔵書目録」があり、また後には

7412 [27-05-15 近代文学の典拠—鏡花と潤一郎、三瓶達司、笠間選書、笠間書院、1974]

という研究書もあるが、いずれも濫澤の著作を見る限り、材源考察に活用された形跡はない。

7302 『幻想文学の異端性について』（『解釈と鑑賞』↓『人形愛序説』第三文明社、1974・10→『少女コレクション序説』中公文庫、1985・3）

同様にして、私たちはまた、上田秋成とヴィリエ・ド・リラダンを、平田篤胤とアタナシウス・キルヒヤーを、平賀源内とシャルル・クロスを、泉鏡花とE・T・A・ホフマンを、折口信夫とウォルター・ペイターを、牧野信一とジェラルド・ネルヴァルを、稲垣足穂とダンセーニ卿を、それぞれ並べて論じることとも可能となるのである。いまや、そういう時代がやってきたと考えるべきだろう。

7402 『魔道の学匠』（『日夏歌之介全集』第7巻、河出書房新社、月報↓『偏愛的作家論』増補版、青土社、1976・8）

私が『明治浪漫文学史』を読んだのは、もちろん、かなり後のことであるけれども、そのなかに泉鏡花との比較において、バルベール・ドルヴィーの短篇集『レ・ディアボリック』のなかの「罪のなかの幸福」（歌之介流に書けば「罪障冥加」）の粗筋が、くわしく紹介されているのを見たときには驚いた。

ただ私としては、鏡花とドルヴィーとを比較するのは筋ちがいで、むしろ鏡花に近い資質の作家はホフマンだと思っているのだが、やはり鏡花とホフマンを対比する視点が続いている。『蔵書目録』中に

68/11 [16-05-02 明治浪漫文学史、日夏歌之介、中央公論社、1968 [初刊 1951・8]]

が確認できる。

7408 「ノスタルジアについて」（『海』↓『記憶の遠近法』大和書房、1978・4）

キリコもマン・レイもエルンストも、いささかオールド・ファッションになったから、骨董趣味のように珍重されるということがあるだろう。泉鏡花の再評価にも、そういう面はあるだろう。（中略）もしかしたら、あらゆる芸術が過去を向いているのである。

「泉鏡花の再評価」、つまり七〇年代の鏡花ブームを受けての発言であるが、ブームの発端を担っていた一人は濫澤自身であり、三島との対談が大きい。

7409 「岡本かの子 あるいは女のナルシズム」（『岡本かの子全集』第1巻、冬樹社、付録「岡本かの子研究Ⅳ」↓『偏愛的作家論』増補版、青土社、1976・8）

明治以後の日本の小説家のなかで、このドッペルゲンガー現象に異常な興味と不安をいだいていたのは、私の知るかぎり、泉鏡花と芥川龍之介の二人なのである。

ときおり顔を出す「春昼」系の発言である。

7410 「文字とデザイン」（『海』↓『記憶の遠近法』1978）

かつて泉鏡花は原稿執筆中、ふと字を忘れると、鏡花夫人にこれを問いただし、夫人が指で宙に字を書いてみせると、ウンウンと頷いてから、真剣な顔をして「早く消せ」と命じたという。

私は鏡花ほど、文字に対する崇拜の念をいだいているわけではないが、それでも昨今のデザイナーの、単にデザインのためだけの文字濫用を目にすると、

メインは鏡花ではなく、例えば話として用いる例。

7510 「ランプの廻転」（『文藝』↓『思考の紋章学』河出書房新社、1977・5）

もしかしたら、古来の幽霊あるいは妖怪のなかで、炭取のような日常の器物を廻転させるという手法は、かなり常套的な手法となっているのではあるまいか、とさえ私には思われた。次に引用するのは、泉鏡花の『草迷宮』のなかの一節である。

7601 「姉の力」（『文藝』↓『思考の紋章学』1977）

「姉の力」ということを言うならば、溝口健二によって好んで映画化された泉鏡花の諸作品、すなわち『滝の白糸』や『日本橋』や『売色鴨南蛮』

の方が、風俗的ないしは心理的な意味で、むしろこの呼称にびったりするであろう。いや、泉鏡花の全作品が、「姉の力」を核として凝集した、一つの甘美な果肉のようなものだとさえ言えるかもしれない。

『思考の紋章学』は中期澁澤の傑作であり、「ランプの廻転」はその劈頭を飾る名作である。別稿で詳しく取り上げたい。「姉の力」では珍しく普段は取り上げない鏡花作品名が出てきているが、扱われているのが映画化されたものだからであろう（『瀧の白糸』の原作は、「義血侠血」）。

76/02「三島由紀夫とデカダンス——個人的な思ひ出を中心に」（『解釈と鑑賞』）→『偏愛的作家論』増補版、青土社、1976・8）

むろん、三島氏は少年時代から、谷崎潤一郎や泉鏡花や日夏耿之介に親しんでいたし、オスカア・ワイルドを代表とする西欧の世紀末文学にも親しんでいた。

三島の思ひ出話と鏡花が強く結びついていることが窺える。

76/02「自己像幻視のこゝろ」（『毎日新聞』1976・2・15→『東西不思議物語』毎日新聞社、1977・6）

古くから、自己像幻視は死の前兆だと言われていたらしい。吉村博任というお医者さんの書いた『泉鏡花・芸術と病理』という本には、この現象が医学的に要領よく説明されていて、非常におもしろい。吉村さんの意見では、小説家の泉鏡花にも、そういう傾向があったのではないかといい。

これも「春昼」系である。

76/06「二度のショックのこゝろ」（『毎日新聞』1976・6・13→『東西不思議物語』1977）

泉鏡花の戯曲『天守物語』は、寛保年間の『老嫗茶話』に出てくる奥州の妖怪譚を原型として、作者が自由に肉づけた艶麗な作品である。

「人柱の話」に基づく材源考察の使い回しである。

76/07「天狗にやらわれた少年のこゝろ」（『毎日新聞』1976・7・25→『東西不思議物語』1977）

泉鏡花の『草迷宮』に出てくる秋谷悪左衛門という魔人は、みずから「人間の瞬間を世界とする」と言明する。つまり、瞬間のなかに住んでいるというわけだ。

「ランプの廻転」から『草迷宮』への言及が始まるが、使い回しの例。

77/03「靴」（『サンケイ新聞』1977・3・10→『記憶の遠近法』1978）

泉鏡花の小説に『革靴の怪』というのがある。小説の語り手が、汽車のなかで偶然に出会った、大きな古ぼけた革靴を持った男と一緒に旅館に泊まると、その夜中に、床の間に置かれた靴のなかから人の声が聞こえてくる、という話である。この革靴のテーマがよほど気になっていたと見えて、鏡花はそれから六年後にも、同じエピソードを複雑に発展させた『唄立山心中一曲』という、前作よりもやや長い小説を書いているほどだ。

これも、前掲「澁澤リスト」にない作品への言及であるが、「姉の力」とは異なり、映画は関係ない。『鏡花全集』第一五巻、第二〇巻という従来等閑視されていた大正期作品を扱っており、遅ればせながら澁澤の鏡花への関心が広がっていることが窺える。

77/12「Ⅲ」（『新劇』「初出題／城——専制君主の夢（第三回）」→『城 夢想と現実のモニュメント』白水社、1981・11）

ところで、私たちは泉鏡花の絶品というべき戯曲『天守物語』のなかに、この気高き女と児小姓森田図書とのエピソードが、たくみに採り入れられているのを知っている。（中略）

もともと鏡花の小説はすべて、俗世間と妖怪世界との対立（『高野聖』でもそうであり、『草迷宮』でもそうである。いや、『日本橋』のような風俗的なものでも、結局は同じパターンである）を契機として動き出すのだが、

やはり「人柱の話」系の使い回し。

78/01「ミイラ取り」（『朝日ジャーナル』1978・1・27→『玩物草紙』朝日新聞社、1979・2）

ライダー・ハガードの『洞窟の女王』やピエール・ブノワの『アトランティッド』などといったヨーロッパの小説作品では、容易にひとの近づき得ない秘境に、不老不死の魔性の美女が君臨している。この系列の作品群には、わが国の泉鏡花の『高野聖』をつけ加えてもよいだろう。心理学者のC・G・ユングは、ハガードやブノワの作品が大いに気に入っているらしく、自分のアニメの理論を説明するために、しばしば彼らの

名前を引用したりしているほどだ。

マリオ・プラーツの継続である。

*78/03「変身」〔朝日ジャーナル〕1978・3・24→『玩物草紙』(1979)

その記憶が、現在でも私に残っているらしいのである。胸がきやきやしてくるのは、そのためであろう。(1)参考までに、この「きやきや」というのは、泉鏡花あたりがよく使う言葉で、それを私が真似しているのである。

*78/09「化けもの好きの弁——泉鏡花『夜叉ヶ池』公演に寄せて」〔『新劇』→

『太陽王と月の王』大和書房、1980・9)

もともと私には、由緒正しい妖怪、いかめしく恐ろしい妖怪、すなわち天狗や鬼などの系列よりも、むしろデモ行進やゲリラ戦を得意とするところの、室町時代以降の弱々しい化けものに対するシンパシーが強いのだが、鏡花もおそらく、私と好みを同じくしたにちがいないと思われる。『夜叉ヶ池』には、明らかに鏡花が登張竹風と共訳したハウプトマンの『沈鐘』の影響が認められるが、影響はそればかりではあるまい。(中略)鏡花の戯曲のなから、そういう器物の化けものの例を探すとすれば、私たちは彼の『深沙大王』という戯曲を見ればよからう。

やはりこれまで触れなかった鏡花作品への注目だが、これは依頼された仕事(「公演に寄せて」)の性質による新たな展開であろう。

*79/01「堀口大學氏の翻訳」〔『翻訳の世界』→『城と牢獄』青土社、1980・6)

「やるにても鏡花は天才だった」と書いたのは、ほかならぬ三島だった(中央公論社版「日本の文学」解説)。たぶん、三島の頭のどこかに、かつて読んだ堀口氏の名文句が、三十年たっても消えずに、こびりついていたのではないだろうか。

やはり三島の思い出に付随する鏡花である。

一九八〇年代の発言については割愛する。

五 その他の鏡花関連書

最後に、これまで紹介できなかった『蔵書目録』中の鏡花関連書を挙げておく。

*73/07 [01-06-32 日本文学における近代、芳賀徹他編、講座比較文学②、東京大学出版会、1973]「脇明子「泉鏡花と夢野久作」収録」

*73/09 [☆20-03-14 銀河と地獄、川村二郎、講談社、1973]「瞳視された空間／泉鏡花」収録

*74/04 [★18-04-04 幻想の論理、脇明子、講談社現代新書、1974]「副題／泉鏡花の世界」

*76/03, 77/03, 79/03, 80/03 [18-04-14「鏡花研究」、n. 2, 3, 4, 5、石川近代文学館] 4の吉村博任「鏡花曼荼羅——「春昼」における密教的風景——」の参考文献に「偏愛的作家論・泉鏡花」、小林輝治「草迷宮」の構造——聴吟幻視譚——中に「ランプの廻転」への言及。

*76/05 [☆16-04-24 泉鏡花——美とエロスの構造、笠原伸夫、至文堂、1976]

*76/06 [☆33-01-94 壺中天奇聞、種村季弘、青土社、1976] [☆28-01-159 壺中天奇聞私家版、種村季弘、壺中館、1976]「水中花變幻 泉鏡花に(こつ)」〔別冊現代詩手帖 泉鏡花特集号〕1972・1)収録

*76/09 [16-04-26 泉鏡花の文学、三田英彬、近代の文学、桜楓社、1976]

*79/10 [22-05-37 夢の舌、種村季弘、北宋社、1979]「水辺の女 泉鏡花生誕百年に寄せて」〔『読売新聞』1973・11・2夕刊〕収録

*79/12 [18-04-08 人間泉鏡花、巖谷大四、東京書籍、1979]

*80/06 [☆24-02-20 泉鏡花、日本文学研究資料刊行会編、日本文学研究資料叢書、有精堂、1980]「対談「鏡花の魅力」再録」

*83/06 [☆18-04-06 泉鏡花の世界——幻想の病理、吉村博任、牧野出版、1983] (〇〇〇)

〔付記〕本稿は科研費22K00343の成果の一部である。

(1) 種村のリストは齋藤靖朗「解題」(種村季弘『水の迷宮』国書刊行会、二〇一〇・一一)で紹介されている。